

説話文学と四国遍路

一

説話・伝説などは、広義の説話文学に含まれるものであるが、その説話文学に見られる四国遍路について、その具体的な様相を見てみよう。四国遍路に関連する説話文学の、最も古い資料としては、『今昔物語集』巻三十一第十四話の「通四国辺地僧、行不知所被打成馬」という話があげられる。その話の表題に見られるように、「遍路」という言葉は、もともとは辺地と同様の意味で使われており、即ち海辺の地をいう言葉であったように思われる。『今昔物語集』の話では、この話の冒頭において、

今ハ昔、仏ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ、四国ノ辺地ト云ハ伊予・讃岐・阿波・土佐ノ海辺ノ廻也。其ノ僧共其ヲ廻ケルニ、思ヒ不懸ズ山ニ踏入ニケリ。深キ山ニ迷ニケレバ、浜ノ辺ニ出ム事ヲ願ヒケリ。

と述べているのである。この話において述べられているように、辺地とは、海岸線のことを言い、その、四国の海岸沿いの道を廻って歩くことを、辺地あるいは辺路と言ったと考えられるのである。道に迷った僧たちが、浜に出ようと願っているのも、そうした点から理解できるであろう。

しかしその道は、同時に、一歩間違えば、恐ろしい道となるものでもあつ

田村憲治

た。道に迷った旅の僧が人家を見つけ、喜んで宿を借りるのだが、実は、そこに宿をとった人が、馬に変えられてしまうような、恐ろしくもあり、また厳しい道でもあったのである。この僧たちは、その庵に居た女に助けられて、命からがら逃げ出すことが出来たのであるが、恐らくは、そうした厳しい道を歩き続けるという、遍路そのものが、仏道の修行となると考えられたのであろう。

次に、江戸時代の人であった、大淀三千風の書き記した、『日本行脚文集』という紀行文学作品には、四国遍路について、

抑も、此の辺路は、弘法大師掟たまふ、信に権化のわざとはいひながら、山海の美景はさらなり、寺社窟窟の奇怪、言語道断の靈辺なり、心あらむ人はかならず一片の結縁したまへかし、五年三年の勸禪にはまさり侍らん。

と述べられている。四国遍路は弘法大師が定めたものであるとすると共に、歩き続けるという遍路の行を、座し続けるという坐禅の行と比較し、その遍路を巡ることの利益の大きさを述べているのである。四国遍路というものが、近世の時代になると、四国という地域を超えて関心を持たれ、広まっ

この四国遍路に関わる話について、四国の中で語り伝えられている伝説の一つとして、伊予国荏原の八塚と石手寺、そして阿波国焼山寺とをめぐる伝説が、よく知られている。この話について記したものは多くあるが、大正時代の頃に、伊予の国に関わる、説話・伝説を数多く蒐集した、西園寺源透氏の記した、『伊予奇談伝説』に所収の話によって見てみよう。(以下、話の概要を記す。)

昔、伊予国の荏原の郷に右衛門三郎という豪族がいた。河野氏の一族とも言われるが、家は富み栄えていた。しかしながら、この三郎は強欲な男で、私利を謀ることをのみ考え、神仏を信じない男であった。ある日、三郎の家を貧僧が托鉢に訪れ、法施を乞うた。しかし三郎は法施を与えぬどころか、僧に対して悪口を言い、更に鎌で打って追い払った。僧の持っていた鉢は割れてしまい、鉢は八片となって飛び散ってしまった。

ところが、その翌日になると、三郎の子が一人亡くなり、次の日も一人、また一人と、一人ずつ子供は亡くなっていき、八日目には、とうとう最後の子も亡くなり、八人の子がすべて死んでしまった。さすがの三郎も、これによって前非を悔いて深く嘆き悲しみ、それまでに貯えた私財は寺社に寄進したり、貧人に施したりして、自らは一笠一杖のみを持って旅に出た。三郎は四国の霊場を巡拝し、二十一度も廻ったという。

阿波国焼山寺に至った時、三郎は心身疲労して遂に倒れてしまう。しかしそこへ弘法大師が現れて、悔悟し仏に帰依したことによって、三郎の犯した罪は悉く消えたことを告げ、三郎に「右衛門三郎」と刻ん

だ石を与え、手に握らせた。三郎は、次に生まれる時には、河野氏の子として生まれたいという願いを述べて亡くなった。

その後、伊予の領主である河野家に、男の子が生まれたが、その子は左手を強く握りしめていて開くことがなかった。そこで安養寺という、河野家の寺に行つて祈願したところ、その子の左手が開いた。見るとその手には、衛門三郎と刻んだ石が握られていた。このことによって、寺の名は安養寺から石手寺へと改められ、生まれた子供が握っていたこの石も、石手寺に納められたという。

この衛門三郎の話に関わる伊予国の史跡としては、石手寺(安養寺)と共に、荏原の八塚がある。松山市の南方郊外にある八塚は、現在も八つの墳丘が、地域の人々によって整備保存されている。また、この八塚のある荏原の地には、文殊院徳盛寺という寺院があり、ここでは、江戸時代から、この衛門三郎についての話を、「絵解」という仏教芸能で語り伝えることが行われて来た。絵解というのは、絵や絵巻物を見せながら話を語り、仏教的な教えを語るものである。和歌山県の道成寺の『道成寺縁起』の絵解きなど、全国に残っている、絵解を伝える数少ない寺院としても知られている。徳盛寺には現在も一部の古い絵を残しているが、絵の痛みもあって、現在ではビデオに収録編集したものを拝観することが出来るようになって